
女の子にメールを送ってみた

しゅーくり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子にメールを送ってみた

【Nコード】

N7279E

【作者名】

しゅーくり

【あらすじ】

主人公の唯一の知り合いの女の子に友達にいたずらで『今から会おうぜ！会って伝えたい事があるんだ！』とメールを送られてしまった。それから友達は無重する事なく勝手にメールを続ける。そして主人公は好きでもない女の子に告白する事になってしまう。そーゆー話です。元ネタ知ってる方がいるかもしれませんが笑小説化してみました。でも設定とか色々変えちゃってるんで・・・まあ一つの恋愛小説としてお楽しみください！

登場人物（前書き）

登場人物紹介です。

設定は覚えてもらっての方が楽しめるかなー

新しい人物が本編で登場しましたら

付け加える予定であります。

登場人物

神谷 諒 かみや りょう

高校2年生。

彼女なし。

甘いもの大好き。

テンション上がると暴走気味になる。

霧島 麗 きりしま れい

高校2年生。

彼氏なし。

神谷と学校は違うけどご近所。

容姿は可愛いけど田舎っ子。

男性恐怖症らしい。

登場人物（後書き）

次回より本編になります。
お楽しみください。

1 回目：女の子にメールを送ってみる。（前書き）

本編 1 話です。

1回目：女の子にメールを送ってみる。

高1。春休み目前の日曜日。

男友達4人が俺の家に来ている。

「なんか飲み物飲む？」

「おーっ。さんきゅ」

「俺コーラがいい」

「あつたらね」

2階の自室にみんな集まっているから1階の冷蔵庫に

飲み物を取りに行く。

冷蔵庫の中にはオレンジジュース、牛乳、おはぎがあった。

コップとオレンジジュースのパックを持って2階上がる。

友達Aが俺の携帯を持っていてその周りで3人も俺の携帯を覗き込んでいる。

「なにやってんの？」

別に見られて困るようなデータはない筈だから

携帯を勝手に見られて怒るような事はしない。

ジュースをコップに注ぎ終わった後に俺も携帯を覗き込んでみると皆が見ていたのはアドレス帳だった。

「霧島麗・・・これって女？」

「あー。そうだよ。それが？」

「神谷、女のアドこの人しかないじゃん」
と笑われる。

「女のアドなんて知る必要ないし」

「それじゃこの唯一、アド知ってる霧島麗との関係は？」

「まさかの彼女？」

「近所の人だよ」

「へえー。タメ？」

「うん」

「学校どこ？」

「南高じゃなかったっけ？」

「女のアドは必要ないのになんでこの人だけアド知ってるの？」

「そういえばメアドをどうやって聞いたのか覚えてない。」

「覚えてない」

別に、最近会ってないし、メールもしてないし」

「なんだよー。せっかくメール出来る女友達なのに」。

神谷にとってアド知ってる女の子って貴重じゃん。

もったいねえ。てか可愛い？」

「だからしばらく接点ないんだって。言っちゃえば友達以下じゃね？」

顔は・・・俺が最後に見たときは普通に可愛かったよ」

「ふうん。友達以下ならメールしてみていい？」

そう言つて、友達Aが俺の携帯を操作し始めた。

「ん？どゆ意味？」

俺が携帯を覗くと、メール作成画面で

本文には

『今から会おうぜ！

会って伝えたい事があるんだ！』

と打たれていた。

「これを麗ちゃんに送る気かっ！？」

「麗ちゃんって呼んでんのかよー。結構親しくね？」

まあ、うまくいけば神谷くん初彼女かもよォー？

振られてもどうせ接点ないんだしプライマイゼロっしょ。

送信っ」

まさか本当に送るとは思ってた。

俺がみた時には既に送信完了の画面が。

いくら好意のない女の子だからと言っても

ご近所だぞ・・・

しかもずっと会って無かった上にメールさえしてなかった男からいきなり「今から会おうぜ！会って伝えたい事があるんだ！」なんてメールがきたら誰でも引く。俺が絶望していると友達達が叫ぶ。

「おっ！返信きたし！」

「んーっと。」

『今からお昼だからちよつと・・・2時以降じゃだめ？』

ええエエー！

「会っていいーのかよっ！」

「おー。良かったじゃん」

いい感じだよー」

「俺は『きしよっ！いきなり何？

もう2度とメールしてくんな！』って来るのかと・・・」

「さーてと。なんて返信しようかな」

流石にこれ以上こいつらの勝手にさせとくとまずい。

俺は携帯をひったくって直ぐ返信をする。

『ちよつと話したかっただけ』と送った。

そうすると直ぐに返信が返ってくる。

『そうなの？

じゃあ2時から暇だし会いますか？』

え・・・？

予想外の返信だった。

周りで見ていた友達が面白そうに携帯を奪ってなにかを打って送信した。

「おいっ！

なんて送った！？」

「すげーいい流れだったから『すきだ』って送ったー」

「はあ！？

2時から暇だし会いますか？で、すきだ。っておかしいだろ！

それ以前に・・・もう、色々おかしすぎるだろ！」

「でも返信きたよ。

『どっという意味のすきですか？？』

ってきた！あははっ。これどうすんの！」

完全に友達達は楽しみまくってる。

もうどうにでもなっちまえよ・・・

「ねーねー。ちくわぶっておいしいよね。って送ってみてよー」

持参したのか、ちくわぶを食べていた友達が言った。

ちくわぶとは・・・知らない人も多いだろうがそういう食べ物があるのだ。

「おーっ。いいねえ。意味不さが」

みんな爆笑してやがる。

俺は笑えねーんだよ・・・

まじでちくわぶはねーだろ・・・

てか麗ちゃんちくわぶなんて知ってたのか？

まあ、これでおちよくられてるって気付いて終わるだろう。

「うおっ。返信きたあ！

『ちくわ？おでんは好きだよ』

だってさ。なんだこの子は。ちゃんと返信してくれるとか神か？？」
やっぱちくわぶ知らないしっ！

・・・麗ちゃんはどんな気持ちで返信してんだ？

1回目：女の子にメールを送ってみる。（後書き）

ちくわぶは関東の方は知らない方は多いかもしれませんね・・・
気になったら検索してみてください 笑

2回目：超展開。（前書き）

超展開はいりまーす。

これが田舎っ子クオリティ！

2回目：超展開。

「頑張つて話あわせてくれてんじゃん。

意外と神谷のこと好きなんじゃねー？」

もう俺にはなんもわかんねーや。

「俺だったらこんなんぜってー返信しねーよ」

相変わらず回りは爆笑してるし。

「次、返信どうする？」

「俺的にはこれ以上変なこと言つてると

まじで返信なくなるかもだから話戻したほうが良いと思う」

「あつ！俺いいこと思いついたっ！

おでんも好きだけど、俺が言いたいのは

俺は君のことも好きなんだって事。

つて送ろーぜ」

また周りは爆笑する。

「うわっ。くせえ。てか何気かけえしね。

それ才能だろ」

なんかとんでも無い事になつてる。

てかもう俺のキャラってなんなんだ？

「よし。送るよ」

「あつ。ちよいタンマ。

付け加えて

こんなことメールで言う事じゃないと思うから会いたいんだけど
我慢できなかった。ごめんね。

いきなりこんなこと言われても困るよね。

つて付け加えて」

「いいねえー」。

もうこの際ついでにあっちがどう思ってたのかも聞いちゃおうぜ」

「よし。んじゃ

『おでんも好きだけど、俺が言いたいののは、俺は君のことも好きなんだって事。』

こんなことメールで言う事じゃないと思うから会いたいんだけど、我慢できなかった。

ごめんね。

いきなりこんなこと言われても困るよね。

でも、君の気持ちを知りたい。自信ないけど……

嫌だったら無視してくれてもいい』

ちよい長文だけど送るよ？」

「凄まじい文章だな」

「嫌だったら無視してくれてもいい。とか何様だよ」

「純愛じゃん。泣けてくるわー」

さつきから俺は一言も喋らない。いや、喋りたくない。

てか、これってまさか本当に会うことになったりしないかな？

俺は関係してないと言ってもおかしくない筈なのに……

あれ？もうどーなってるんだ？

しばらくして携帯が鳴る。

そういえば俺の携帯なんだっけ……

「『ごめんなさい。』

会って話したいです

今日何時くらいならいいですか？』

って……」

「なんだソレ！超展開じゃねえーか！

神谷！もう会って話して来い。初彼女だぞ！」

「これ俺等がキューピットじゃね？」

「いや。

あっちは俺達がおちよくってる事を察して

度が過ぎすぎてゐるから、それに怒ってリンチする為に会おうって言ってる・・・という可能性も・・・」

「あー。ありえなくも無い話だな」

「ちよつと様子見るためになんか送るか・・・
すきだ。はさつきつかつちやつたからなあ」

「愛してる。でいいよ」

「わかった。『愛してる』」

「・・・送信完了」

もう友達が何考えてるのか分からない。

本当にリンチだったならされるの確実に俺じゃないですか。
しかも、また返事になってないし。

全然様子みられねーし。

「いつか絶対返信こなくなるって」

「うおつ。これでも返信きたよ！」

『えっと・・・』

神谷くんが今日の時間決めてください」

「流石に愛してるへのつつこみはなかったな。

まあ返信がきただけでもおっけ。

とりま、そろそろ時間決めるか」

あー。会うのって俺だね？

俺は会ってもいいって言ってないんだけど。

てかあんな意味わかんないメールしといて

会うとか・・・

ほんと、俺って何？

「『俺は何時でもいいけど・・・』」
って返信しといたぞー」

「てかさ、結局神谷が会うの？」

「それ以外ないだろ」

「あつ、神谷。」

ここはお前が決めていい。

もしも会ったらどうする？

1、俺達がやった冗談でしたーって言う。

2、麗ちゃんのことを本当に好きなんだって言う

3、その他

でもな、俺達は飽くまで協力してんだからな」

そりゃどーも。

でも、俺に恋愛感情なんてないんですが・・・

「諒にとつても2がいいんじゃないかね？」

諒って上の下くらいのイケメンなのに

女と関わり持ちたがらないから彼女できないだけなんだから。

もうここですっけ付き合っちゃえば」

「『3時で大丈夫ですか？』

ってきたよ」

「わかったよ・・・

会ってみる。

てか会ってやるよ・・・。もう」

てか、もう1、2、3で選ぶ答えは決まってるようなもんだ。

今更冗談でしたーなんて言ったらいくら麗ちゃんでも

本気で殺されるかもしれない。

3のその他って・・・。

なにすりゃいいんだよ。

よって2を選ぶしかないようだ。

2なら告白しても玉砕ですむだけだろうし。

一生メールできなくなるだろうけど。

「マジで！？じゃあ3時に会う約束するよ？」

「・・・いいよ」

俺、ノリ良すぎ。人良すぎ。

2回目：超展開。
(後書き)

次回

告白、そして・・・

3回目・告白（前書き）

リンチかつ！？リンチなのか？

流れで、神谷はやケになって告白してしまう。

果たして結果は・・・

3回目：告白

その後、3時に会う約束をした。

「俺の家は自由に使っていいから。

絶対、ついてくるなよ」

「分かってるよ。がんばれよ！

時間あったらメールで報告しろよ」

それから2時半に家を出た。

だが、俺は気付いていなかった・・・

目的地まで5分についてしまうということを。

2時40分に約束の公園到着。

やっぱ早すぎたな・・・

てか、本当にくんのかな？

そういえば告白しなきゃいけないのか。

そんな事を考えながら待っている

10分も経たないうちに麗ちゃんが現れた。

早いなあ。と思いつつ

「おはよう」

と挨拶をする。

「おはよ。待った？」

そう聞かれる。

「いや。っていうかまだ約束の時間じゃないし」

「そうだね」

さっきあんな気持ち悪いメールしてたのに普通に話せてるよ・・・

でもこれからリンチって可能性も・・・

そんな俺の思いとは裏腹に

公園のベンチで「久しぶりだねー」とか話した。

緊張していて意識して見れなかったけど

改めて麗ちゃんをみてみると可愛くなっていた。

「長くなりそうだったらうちで話す?」

「俺は別にここでいいけど」

「でも、雨ふりそうだし。おいでよ」

この流れで麗ちゃんの家に行く事に。

あつ。でもこのまま家でリンチっていう可能性も……

家に行くまでは会話がなくて、そのせいで

被害妄想が更に膨らみ物凄く怖かった。

麗ちゃんの家のリビングに通された。

昔に何度かきたことがある。

麗ちゃんがコーヒーをだしてくれる。

「あ、ありがとう」

コーヒーを入れてもらった後、物凄く気まずい雰囲気になった。
これも全てメールのせいなのか?

コーヒーを何口か飲んだ後に麗ちゃんが口を開いた。

「さっきのあれって……いたずら?」

「え?あれって?」

みすったああ。

分かっているのにとぼけてしまった……

「……好きって言うやつ」

麗ちゃんの顔は軽く赤い。

ふう。

ここまできたらやるしかないか……

「いや、俺はかなり本気なんだけど」

「だってちくわとか言ってたじゃん……」

そういえばちくわぶとか送ってたな。

そりゃいたずらと思われても仕方ない。ってか実際

いたずらな訳で。

どうやって弁解するか・・・

「あれは照れっというか、ちょっと誤魔化そうとただけで！」
キタな。

流石、俺のフオーク。上原もビックリのキレだぜ。

「そうなの？」

「うん」

納得・・・してくれたのかな？

まあここでちよつと念を押しとくか。

「本気だから」

別に恋愛感情があるわけでもないんだから結果がどうであれいいんだ。

友達も結果なんて気にしちやいないだろう。

「あたしのことが好きなの？ほんとに？」

「うん」

「ありがとう」

ありがとう？ごめんは良く聞くけどありがとうとは？

「ありがとう？」

俺にはわからない事だらけで、つい聞き返してしまった・・・

「ん・・・神谷くんはあたしのこと、何で好きなの？」

「何でそんな事聞くん？」

うわっ。俺さいてーだ。応えられなかったしっ！

「気になるから。最近会ってなかったし」
なるほど。

ってか、どこが好きかなんて考えてなかった・・・
ここを流すことは出来なそうだ。

「良くわかんないけど、前から好きだった。
麗ちゃんって優しいし」

全く。俺の口は。

しばらく俺は麗ちゃんの顔を見れずにいた。
麗ちゃんも黙ったままだった。

3 回目・告白（後書き）

ジラース。

軽いいたずらの筈が何故か告白につ。

結果は次回！

4回目：結果。理由。これから。

そして20秒くらいの沈黙が流れ麗ちゃんが言う。

「ありがと……。嬉しいけど、ごめんなさい」

.....

.....

...

うは。もう。しんじやおっかな。

もともと好きだったわけじゃないけど、流石に少し期待した分シヨツクでかい。

「うん、そっか、いや、いいよ・・・」

何故か泣きそうになってる俺。

またしばらく沈黙があって

「神谷君のこと、嫌いじゃないよ」

うん。ありがと。嫌われてはないんだね。うん。

彼女なりに慰めてくれてるんだ・・・

今度は俺が言う番だ。

「ありがとう。」

いや、いいよ。ほんとに」

目の前にあったコーヒーに口をつける。

「あたしね、だめなの」

ん？

麗ちゃんはもう殆ど泣いているように見えた。

「男の人と付き合うとか、良くわかんないもん・・・・怖い・・・・」

ああ。本当に俺のことが嫌いだから

振ったつうわけじゃないのね。

ここである考えに至った。

この子メンヘラーじゃね？

ここで言葉をかけなければと彼女に言った。

「えっとね、大丈夫？」

「うん」

「そう・・・」

またしばらくの沈黙。

「話聞いてくれる？」

そういつて彼女は涙で濡れている目でこっちを見た。

正直可愛い。

「どうぞ」

ここまで流されたらもう海まで行ってやろうじゃないか。

俺はとりあえず話を聞くことに決めた。

「男の人怖いん？」

「・・・うん」

普通はここで終わるところだが、話を聞くといった以上突っ込まなければ。

GO！俺のチキンハート。

「何で怖いのか？」

「神谷くんはしないけど、暴力ふったりするじゃん？それに・・・」

「それに？」

「男の人ってエロいから・・・」

やあ、皆さん。男性全員否定されました。

「だから嫌いなのか？」

「嫌いじゃなくて、怖い」

「男と付き合ったこととかもない？」

「ないよ」

うわ。まじでメンヘラなんじゃね？

振られたり理由が判明したところで、少し気持ちが楽になった。

「いや、でもさ、うん」

男はみんなそんなもんだよ。とか言おうとしたけどやめた。

俺はもうちょつといい人でいたいんだ。
裏切り者の俺を許せつ。

「じゃあ、俺もちょつと話すから聞いてくれる？」

「うん」

「麗ちゃんみたいな理由で女の子が男を怖がってたら何もできない
と思うよ。」

「やっぱりお互いに許容しあっていくのが、男女なんじゃない？」

俺は振られた後に未練がましい事を言うキモイ男だよ。

そういうと彼女は黙る。

「麗ちゃんももうちょつと考え方変えないとダメだと思うよ」

あれ？俺、ここに何しに来たんだっけ。

「・・・分かつてる」

「分かつてるけど、納得できないの」

「まあ、わかるけど・・・」

「皆彼氏いるけど、あたしだけいないし・・・」

「怖いから？」

「うん・・・」

このまま話しても2人きりだから助け舟は出ないし・・・
時計を見ると5時に差し掛かっていた。

「あ、えと・・・」

日も落ちてるしそろそろお邪魔したほうがいいかな」

スライムは逃げ出した。

「なんか食べていく？」

しかし、回り込まれた。

ポッキーとか色々出してくれた。

食べながら話す。

「今日はごめん」

とりあえず謝っておく。

まあ、ほんとはいたずらしてごめんなさい。なんだけど・・・でも、今回のことでちよつと好感を持てた。

「あたしもごめんなさい・・・」

「いやいや、麗ちゃんは悪くないよ。」

それに何か説教みたいな事も言っちゃったし」

「あたしの事嫌いになった？」

「なつてないけど？」

「まだ好き？」

「うん」

光の速さで答えた。

ここはそうしとくべきなんだろうと思って。

綺麗な流れじゃないか。なあ。

そしてこれからバイトだからという理由で、メールする約束をして帰った。

結果だけ見ると俺は振られたんだな。

まあ、初めと終わりがあれだったから、泣くような失恋ではなかったけど。

（一部泣きそうになったけど）

5 回目：助人（前書き）

前回見事に告白に失敗した主人公こと神谷諒。
だがその後の展開でまだ望みがあることがわかる。

5 回目：助人

帰ってきてからはもう俺の家には誰もいなかった。
そりゃ予定の時間より遥かにオーバーしたんだからな。

それからバイトに行ったりでなんだかんだ、落ち着くのが夜の11時だった。

一応友達にはメールで今日の事を報告しておいた。
そしたら

『お前と付き合えない理由は男性恐怖症なんだろう？
だったらもつと親しくなれば確実に落とせるじゃん。
一度振られたぐらいで諦めるな』

・・・

まだやるんですか。

まあ、メールする事になったんだからとうぶんは続きそうだな・・・
あいつらがいたずらメール送った当初ほど嫌というわけじゃないし、
いいんだけど。

そんな事を考えていると早速麗ちゃんから

メールが来ていた。

『バイトお疲れ様。』

時間大丈夫でしたか？』

『ありがとう』

時間は全然大丈夫』

『そっか、よかった』

メールこないから嫌われたのかと思いました』

ふと、思っただけで何で敬語なんだろう。

『嫌いにはならないよー』

ていうかまだ起きてたん？』

『ありがとう・・・』

うん、ちよつと」

そういえば俺って女の子と遊びに行った事ねーよ。

「ちよつと？」

どうかした？」

「えと・・・何でもないです

今日はもう寝るね

神谷くんも暖かくして眠ってください

おやすみなさい」

今考えると

「ちよつと？」

どうかした？」

はないな・・・

俺は今のメールの流れをさっきの友達（和義くん）に送ったら

和義メール「それだからお前は・・・」

俺メール「ジエントルメンとしては、これはどう受け取るべきですか？」

和義メール「一生起きてくんなってことでは？」

やっぱ、永眠ですか・・・

とりあえず麗ちゃんにフォローメールをつ。

「何かごめんね

明日またメールしてもいいかな？

おやすみなさい」

送信！

上出来だ。

そういえば和義かずよしとはビックリするほどのイケメンでもちろん女の子からももてもてタイプである。

そんな方が俺の友人なんてビックリだろ？

さて、今の完璧メールを和義に報告すると、
『寝る相手に質問すんな』ときた。

・・・

しまったあああああ

あ、でも返信キタ。

『してくれるの？

だったらしようね、おやすみなさい』

結局寝るみたいだ。

一応これも軍師の和義君に報告した。

『そんなメールに返信してくれるといい子だな・・・

今更だけど、麗ちゃんって結構好感もてる子なんじゃないだろうか。

田舎独特純粹さが良いな』

それは俺も思います。

もう再アタックするしかないな。

でも再アタックとなると今度こそ俺のチキンハートをフル回転って
ことになるな・・・

俺の考えを和義に送ると

『とりあえず、再アタックはしばらく考えなくて良いと思う。

今日の事で一応連絡とるキツカケができたんだ。

あせりは禁物、相手に気を遣え、普通に友達から始める。

それと、エロは厳禁な』

『流石は俺の軍師様！

頑張りまっス！

よし、今日はもう寝る。お休み・・・』

こうして色々ありすぎた1日が終わった。

5 回目：助人（後書き）

強力なスケツト、軍師こと義登場。

神谷もやる気になってようやく物語りは動き出します。

これは終わりではなく新たな幕の始まりに過ぎない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7279e/>

女の子にメールを送ってみた

2010年12月4日14時54分発行